平成17年度資源評価票（ダイジェスト版）

標準和名 トラフグ

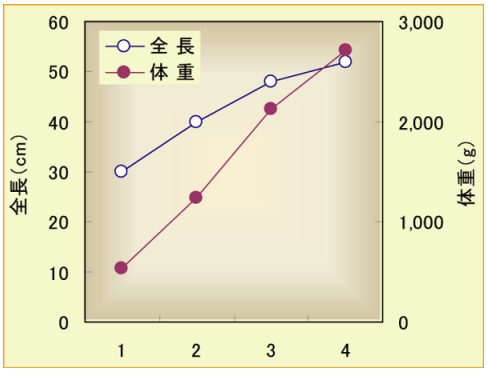
学名　*Takifugu rubripes*

系群名　瀬戸内海系群

担当水研 瀬戸内海区水産研究所

生物学的特性

寿命:　10歳程度
成熟開始年齢:　雄2歳、雌3歳
産卵期・産卵場:　主に4～5月、関門内海、備後・芸予瀬戸、備讃瀬戸など
索餌期・索餌場:　0歳は夏～秋季、1歳は春～秋季、内海域
食性:　稚魚期は底生性の小甲殻類、未成魚期以降はイワシ類などの魚類や甲殻類
捕食者:　不明

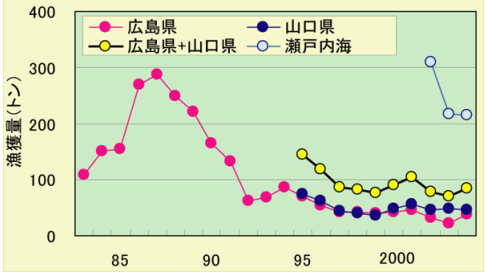


漁業の特徴

親魚は春季に産卵場で定置網、吾智網、釣り、敷網等で漁獲される。幼魚は産卵場の周辺で小型底びき網、定置網で漁獲され、成長に伴って秋季には外海に近い伊予灘、豊後水道及び紀伊水道で延縄で漁獲される。日本海や東シナ海・黄海に回遊する個体もある。漁獲量はフグ類に一括されていた。広島県と山口県のトラフグ漁獲量は1995年の144トンから減少傾向で推移し、2004年には85トンになった。瀬戸内海では2002年から漁獲量が把握され、2004年は215トンであった。

漁獲の動向

2004年春季の親魚を対象とした漁は東部の庵治（香川）では5トン、西部の走島（広島）ほか5つの漁協では13トンを漁獲した。2004年秋季～2005年冬季の未成魚を対象とした漁は東部の椿泊（徳島）ほか3漁協では2トン、西部の姫島（大分）ほか6漁協では15トンを漁獲した。当歳魚を対象とした漁は東部での状況は不明であるが、西部の田尻（広島）における8～12月の漁獲量は1996年を底に上向きになっていたが、2003年と2004年は少ない。

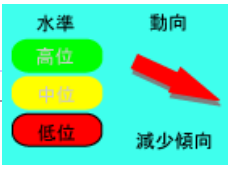


資源評価法

瀬戸内海ではほとんどの県で単一種として漁獲量を把握できておらず、資源の量的評価はできない。しかし一部の漁協において、月別の漁獲量や漁獲したトラフグの年齢構成を把握しており、それらの年変化から資源の水準や動向に関する質的評価を行った。

資源状態

2004年の親魚量は、1989年以前の7年間の平均値を基準に東部で12%、西部で7%に低下している。未成魚量は同様に東部で12%、西部で6%となった。資源は低水準で、動向は減少傾向にある。1996年以降、親も仔も少ない状態にあると見られる。



管理方策

2002年から統計収集システムが改善され、瀬戸内海のほぼ全県でトラフグの漁獲量が収集された。2003年と2004年の漁獲量の平均値の8割をABClimit、ABClimitの8割をABCtargetとした。

	2006年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	173トン	0.8Cave2-yr	-	-
ABCtarget	139トン	0.8・0.8Cave2-yr	-	-

資源評価のまとめ

- 親魚量は低位、1996年以降親も仔も少ない
- 1999年以降加入は上向きであったが、2003年と2004年は減少
- 資源水準は低位、動向は減少

管理方策のまとめ

- 資源の減少は過剰な漁獲が原因
- 資源回復を図るには、漁獲量の抑制や種苗放流の強化が考えられる
- 親魚と未成魚で漁獲される地域と漁法が異なるため、バランスを考えた資源管理が必要
- 2歳頃から一部が東シナ海や日本海西部に回遊し漁獲されるので、これらの地域と連帯して資源管理を行う必要がある

資源評価は毎年更新されます。